

吉田健一著作集

補卷 II



読む領分他

年譜 索引

集英社



吉田健一著作集 補卷二

読む領分 他

昭和五十六年六月二十日 第一刷印刷

昭和五十六年七月四日 第一刷發行

著者 吉田健一

發行者 堀内末男

發行所 株式會社集英社

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號

電話 東京 (二三八) 二八四二〈文藝出版部〉

東京 (二三八) 二七八一〈販賣部〉

整版所 株式會社中臺整版

印刷所 大文堂印刷株式會社

製本所 株式會社石橋製本工場

© 1981 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0395-171032-3041 著・編・監・訳・校・印・刷・行・發・行・所・代・理・店・石・橋・製・本・工・場

吉田健一著作集補卷二 目次

ハムレットに就て

「息子と戀人」

本當の話

T・S・エリオット

オスカア・ワイルドのこと

英國の詩

今昔物語

斷絶から聯絡へ

「テムペスト」隨想

或る國語に就て

イィヴリン・ウォオ「ギルバート・ピンフォールド

の試練」

*

讀む領分

九

一四

三

七

三

四

四

五

六

七

三

五

- 1 中村稔「羽蟲の飛ぶ風景」 五
- 2 河上徹太郎「歴史の跫音」 一〇
- 3 中村光夫「雲をたがやす男」 二三
- 4 大岡信「悲歌と祝禱」 三六

*

- 谷崎潤一郎「蓼喰ふ蟲」 二四
- 三島由紀夫「愛の渴き」 二七
- 大岡昇平「野火」 二五
- 神西清「恢復期」 二六
- 井上靖「風林火山」 二八
- 水上勉「五番町夕霧樓」 二七
- 大正の名作 二七
- 大佛次郎「ごろつき船」 二五
- ドナルド・キーン「日本との出会い」 二〇

*

石川淳「夷齋俚言」

二〇七

グレアム・グリーン「愛の終り」 田中西二郎譯

二〇九

河上徹太郎「わが旅わが友」

二二二

「今古奇觀」上 千田九一他譯

二二四

中村光夫「現代作家論」

二二〇

寺田透「詩的なるもの」

二三三

丸谷才一「エホバの顔を避けて」

二三九

丸谷才一「梨のつぶて」

二三二

中野好夫「シェイクスピアの面白さ」

二三三

バルザック「おどけ草紙」 神西清譯

二三七

河野多恵子「不意の聲」

二三九

秋山駿「無用の告發」

二四七

稻垣足穂「ヒコ―キ野郎たち」

二五三

中村光夫「明治・大正・昭和」

二五

舟橋聖一「瀧壺」

二六

金井美恵子「兔」

二七

白洲正子「十一面観音巡禮」

二八

福原麟太郎「われとともに老いよ」

二九

*

文藝時評

三〇

吉田健一年譜

三一

解題

三二

索引

三三

讀む領分他

ハムレットに就て

「ハムレット」といふ作品は出来損ひだとT・S・エリオットが言つたことが時々引用されてゐるのを見掛けることがある。確か、シェイクスピアは自分の手に餘る人物を作り出して、それが作品全體の調和を破つてゐるといふ論旨だつたと思ふ。これはエリオットが作品を制作といふ一つの行爲の結果として嚴密に評價することを常に主張してゐて、それ故に作者の意圖からはみ出した人物などといふものは認められなかつたのだと考へられるが、エリオットの批評上の方法とか、それが文學史的に持つてゐる意味とかいふことから離れて、直接にシェイクスピアから我々自身が受ける印象を語るならば、ハムレットのやうに作者の手に餘るとも見られる人物を作ることこそシェイクスピアの特色があると言ふべきである。

現に、ハムレットは一箇の生きた人物であつて、その生き方の烈しさにはフォルスタッフに匹敵するものがある。それは既に作者の意圖の問題ではなくて、シェイクスピアは自分が作つた人物とともに破目を外せばよかつた、とさう思はれることが許される感じさへする。或は、もしハムレットを描

いてゐるシェイクスピアの手付きに節度が見られるならば、それはハムレットが感情の波にさらはれずにある爲に自分自身に課してゐる節度だった。そして勿論かういふことは、エリオットが制作の仕事に就て持つてゐる理論からは許されない。エリオットに就てよく聞かされる古典主義的な嚴正といふことは、結局は作品に登場する人物を操り人形に化することなのであり、操り人形に生きた人間の感じを與へることが文學上の技巧の凡てになる。

エリオットは又、フランスの象徴派に屬する詩人のラフォオルグが描いたハムレットは青年期の思想や感情の過多に悩むハムレットで、ラフォオルグの作品はさういふ人物を表現することに成功してゐるが、シェイクスピアのハムレットは大人であつて、それだけに文學的な表現を越えた或る恐しいものが、シェイクスピアの作品を何か統一が取れないものにしてゐるとも言つてゐる。

確かに、二十七歳で死んだラフォオルグ自身の精神状態を多分に託したと思はれる彼の「ハムレット」は、青年の未熟をそのまま青年の未熟に扱つてよく纏つた作品である。併しシェイクスピアのハムレットが大人であることは、それ程得體が知れない恐怖や不安を我々に押し付けるものだらうか。もしさういふものがこの世に實在するならば、我々はシェイクスピアの作品に接してではなくて、現實の世界でそれと戦つた經驗が既にある筈であり、シェイクスピアのハムレットが同じ經驗をしてゐるのを見て顔を背ける必要はない。我々は彼に一人の戦友を認めるだけのことである。

それにハムレットは、彼自身が何からも顔を背けるやうな人間ではない。そしてこれは彼がさういふことをしないと同時に、さうしたくなることがどういふことを意味する。皮肉を言ふといふことから彼位遠い人間はゐないのであつて、彼の冗談がどんなに人間といふものに對す

る嫌惡に満ちたものに聞えても、彼は單に自分が見たことを率直に語つてゐるに過ぎない。エリオットの方が寧ろ、人生の多くの面から顔を背けた一箇の文學者ではないだらうか。そしてハムレットの言葉は、その一つ一つが行爲であると考へていい位、彼が見てゐる現實を正確に突き留めてゐて、それはその現實を切つてゐるといふ印象さへ與へるのであり、彼は言葉を劍のやうに使ふ。

併し彼はその劍で自分も切つてゐるのである。併し自嘲といふことも、彼のやうに縁がない人間もゐない。自嘲はせいぜい、自分に對する責任の回避であつて、その上に又、人前で體面を繕ふことでもあるのだから、自嘲する人間はその言葉通りに輕蔑に價する。併しハムレットは自分で自分を切る痛みに堪へてゐる。

自分の中にも醜惡な人間を認めるから、それをオフエリアにも言ふのであり、オフエリアにそれで慰めて貰はうと思つてゐるのではなくて、彼はその時、奥齒を固く噛み締めてゐたに違ひない。それだけに、ハムレットが退場した後のオフエリアの悲嘆には我々の胸に迫るものがある。併し勿論、ハムレットがそれで救はれる譯はない。

尤も、ハムレットが自分か他人か、誰かを傷けるやうなことばかり言つてゐるといふのではないので、例へば、「この餘りにも堅固な肉體が溶け去つて、露となつて消えないだらうか、」この獨白にしても、或は度々引用される第三幕第一場の初めに出て来るものにしても、或は又、これもエリオットの考へでは場違ひだといふことになるらしい俳優の演技に關する臺詞にしても、ハムレットが普通に人間がものを考へてゐる時の調子になることもある。頭が鋭いとか、人一倍に敏感だとかいふことは、普通の人間とは違つたものになることではない。

ハムレットは恐しく正氣な男なのである。そこに彼の悲劇があるかも知れないので、幽霊が出て来ようと、オフエリアが身投げしようと、彼の正氣の人間の冷い自覺から逃れることが出来ない。彼がラエルテスに言ふ、「私は四萬人の兄よりもつとオフエリアを愛したい、」といふ言葉も、これも事實を率直に語つたものであつて、誇張ではないのである。そしてラエルテスの言葉は誇張のやうに聞えるのが、シェイクスピアの劇作家としての技巧といふものだらうか。

その前に出て来る、墓場での獨體を手にしての臺詞は、この作品に出て来る最も美しいものの一つである。これは詠嘆ではなくて、他のハムレットの臺詞と同様に事實の認識なのであるが、その認識の重荷を負はされたまま一人前に振舞ふことを強ひられてゐる人間が、さういふいざこざが凡て終つたものに就て言ふことは、既にその凡てが終つた状態を思はせて、慰めに近いものを漂はせてゐる。併しそれではハムレットの現實主義が満足しなくて、彼はしまひに、「何て臭いんだらう、」でけりを付ける。

こんな風にも考へられる。人間には人間であるといふ一つの規準があつて、これは境遇によつて變るものではない。そしてその境遇が堪へ難いものになつて泣き崩れるとか、發狂するとかいふのが如何に人間的なことであつても、我々がその場合、一時的にもせよ人間であることを止めたのは動かさない事實である。人間は常に人間でなければならぬ。そこにハムレットの、或はシェイクスピアの理想主義がある。併しこの理想さへも捨てれば、我々は人間ではなくなるのである。この一線を、ハムレットは全く颯爽と死守してゐる。そしてその意味で、エリオットのどんな評言よりもイエイツの「ハムレットもリヤ王も陽氣だつた、」といふ言葉の方が、遙かに問題の核心に迫つてゐる感じがする。

ハムレットに就て

のである。

「息子と戀人」

ロレンスはその數十に上る著作で、ただ一つのことしか言つてゐない。これは或る意味では、凡て優れた文學者に就て指摘出来ることであつて、ただ、初めから焦點がその一つのこと絞られてゐるか、書いてゐるうちにそれが書いてゐる方に段々解つて來たのか、しまひまでそれが解らなかつたのであつても、作品で次々に扱はれた幾つかの面を合せれば、結局はその幾つかのものがただ一つになるのか、といふ種類の違ひがあるに過ぎない。それ故に、これだけではロレンスの特色を擧げたことにはならないが、それにも拘らず、これがロレンスの著しい特色をなしてゐることを示す爲にも、一人の文學者が言へることはただ一つであるといふこの事實に就てもう少し説明して見たい。

例へば、シェイクスピアが言つてゐることは一つであると考えるのは、それが何であるかは別としても、多くのものに聊か異様な感じを與へることは確かである。寧ろ、彼の作品の内容が餘り豊富なので、それでシェイクスピア學なるものが成立してゐると見た方が正しいのではないだらうか。その通りなのであるが、それ故にやはりここではそのシェイクスピアの一つが、何であるかを問題にした方が早いかも知れない。それは彼の文體にも感じられることである。と言つてしまへば、このことの一般的な性格がすぐに解る筈であるが、シェイクスピアの場合も、彼の文體が初期、中期、といふ風